【佳作】

アンラコル

パンとワインは相反する形で
不完全な一つの作品になる
ラフマニノフのメロディーが
頭の中を回転する
私は世の中からしたら半透明的な存在だ
私は世の中の二元論から外れた人間だ
この世は当たり前の空想からできているのだ

甘い柔軟剤の香りに誘われ
暗いクローゼットの中に座り込む
私の心をネットに接続する
僕の心に咲いている黒百合は
醜い匂いを放っているが
僕はそれに気がつかない
黒百合を取り出し
海の中に放り込む
地球のどこかの
顔も知らない人の手に渡り
また僕の所に戻ってくるだろう
その時、僕は私を愛せるだろうか
その時、私は人を愛せるだろうか

国際日本学部　歴史民俗学科２年　岩田　勇輝

コメント

アンラコル（anrakor）とはアイヌ語でクロユリを指し、「黒い葉を持つ」という意味を持っています。クロユリは北海道の低地や東北地方の高山地帯に自生している高山植物です。草丈が高いものが「蝦夷黒百合」、草丈が１０センチから２０センチの低いものが「深山黒百合」と分類されます。クロユリは五月から８月に開花を迎え、黒や紫といった色と下向きに咲いた姿がなんともミステリアスな雰囲気を醸し出しています。独特な匂いを放つことから川端康成の『山の音』の「花の鐘」の章の中で、クロユリの匂いを「いやな女の、生臭い匂いだな」と表現しているそうです。花言葉は「恋」と「呪い」でアイヌ民族の言い伝えや黒百合伝説が由来となっています。私は詩の題材を考える上で、運命的にクロユリという植物と出会いました。花言葉の由来となった物語を調べ、今回の作品にうまく落とし込めたと思っています。機会があったら、黒百合の昔話もぜひ読んでみてください。